

**目的** 成人男子の衣服構成にあたり、設計上の基礎資料として、年齢的な体型の変化を把握することが要求される。今回は、鹿児島県人の資料を得るために、1980年8月と1981年8~10月に計測した成人男子432名の横断的資料をもとに、20~59歳までの体型について年代的な変化の傾向を考察してみた。

**方法** 被験者は、鹿児島市、及び、郡部の農村地帯の企業、主として生産加工工場に勤務し、軽作業に従事する者が約90%で、残りの約10%が一般事務従事者である。計測はマルチン人体計測器による。研究項目は、高径4項目、周径6項目、長径4項目、その他2項目の合計16項目である。被験者の年齢区分は、5歳間隔の8年齢層とした。

**結果** 1. 身長など高径4項目は、加齢とともに漸減の傾向がみられ、身長の平均値は20歳代前半の167.8cmが最高で、50歳代前半では161.7cmとなり顕著な減少( $P<.01$ の有意差)を示す。また、後胸高、右前上腸骨棘高、下肢長の対身長比では、3項目の各年代層ともに横ばい状態を示し、身長との比率には加齢に伴う変化はみられない。

2. 周径項目のうち、乳頭位胸圍<sup>1)</sup>、下胸圍<sup>2)</sup>、腰圍<sup>3)</sup>の平均値は、20歳代前半が最小(1) 85.3cm, 2) 72.6cm, 3) 87.8cm)を示し、20歳代後半との間に顕著な増加(1) 3.2cm, 2) 3.7cm, 3) 2.5cm =  $P<.01$ の有意差)がみられ、その後、乳頭位胸圍と腰圍では横ばい状態を示す。下胸圍では40歳代前半まで漸増、続いて横ばい状態への移行を示す。また、対身長比では3項目ともに示数値の最小は20歳代前半で、20歳代後半との間に顕著な増加( $P<.01$ の有意差)を示し、その後40歳代まで漸増を示す。